

「付加語条件」とは何だったのか。

葛西清蔵

0. 筆者は葛西 (2006) において、英語学ではまず言語事実を注視し、特定の理論を支持するような視点で事実をみるべきではない、ということを主張した。本稿ではいくつかの制約、条件を参考にしつつ、adjunct condition (「付加部条件」) を批判的に検討し、この条件では言語事実がどのように捉えられていたかを見、それをふまえ、この条件が言語事実を軽視した、検証が不十分な「条件」であった、と結論する。章わけはつぎのようにする。

- 1 「付加部条件」とは
- 2 いくつかの段階性
- 3 段階性をめぐる四つの事実
 - 3・1 「うそテスト」 (lie test)
 - 3・2 「指定主語条件」 (specified-subject condition)
 - 3・3 「前置詞残留」 (preposition stranding)
 - 3・4 「架橋動詞」 (bridge verb)
- 4 新たな視点 — 「心的態度の一貫性」
- 5 まとめ

1. 「付加部条件」とは。

まずつぎの例文を見よう。

- 1.a *What did John leave [before fixing t]?
- b *Which city did you meet the man [from t]?

(1a、b)の文は非文であるが、それは、それぞれ *t* の部分から、*what*、*which city* を抜き出し、文頭に移動したためとされる。[]部分が adjunct (付加部) であるため、この部分からの抜き出し禁止を ‘adjunct condition’ 「付加部条件」という。Adjunct は complement (補部) に対する用語であり、概略、補部は動詞の必要部分であり、付加部は修飾部分といえる。補部からは、つぎの (2a、b) に見るように抜き出しが可能である。これが「補部以外の領域から要素を抜きだせない」とする「抽出領域条件」(Condition on extraction domain) である。

2.a What did you put *t* on the table?

b Who did you meet *t* at the station?

この条件は、後に「障壁」(barrier) (Chomsky 1986) の理論で説明されるようになる。「障壁」は、要素A、Bの間にRという関係がある場合、この関係Rを妨害する範疇のことである。つぎの例を見よう。

3.a *What did [_{IP} [_{NP} that John saw *t*] surprise Mary?

b *Who did you see [_{NP} the book [_{CP} which Mary gave to *t*]]?

(3a、b) ともに *t* の部分から、それぞれ *what*、*who* を文頭に抜き出したために非文になっている。(3a) はもともと「主語条件」(subject condition) とよばれ、主語部分から要素を抜き出すことはできない、というものであり、(3b) は、「複合名詞句制約」(complex NP constraint) であり、関係形容詞節から要素を抜き出せない、とするものである。「障壁」理論では、(3a、b) ともに「障壁」となる二つの範疇、(3a) では IP、NP、(3b) では NP、CP を越えて移動しているために非文になっているとする。要素は一つの障壁しか越えることができないというのである。これが「下接の条件」(subjacency condition) (Chomsky 1973) にあたるものである。

「付加語条件」とは何だったのか。(葛西清蔵)

文はつまるところ要素の集まりであり、これが構造をなしているわけであるが、これらの要素は、すべて同じ結合力で繋がっているわけではなく、Haiman (1983)⁽¹⁾がいうように、近い関係にあるものほど、近い位置にある、というように、ある部分では結合力が強く、そこからの要素の抜き出しを許さないというようなこともありうる。これらの要素間の関係の強いところが、抜き出しなどの文法操作を拒否する「島」(island) (Ross 1967)といわれるものといえる。このような結合の強さを示すのは(3a、b)で見た「主語条件」、「複合名詞句制約」のほかに、

- 4.a *What table will he put the chair between [t and some sofa]?
b *What did he wonder [where John put t]?

で、(4a)のように、andなどで接続されたものの一方を抜き出すことができない「等位構造制約」(coordinate structure constraint)、(4b)のように、疑問を表わす節の中から要素を引き出すことはできない「WH 島条件」(WH-island condition)がある。

「主語条件」、「複合名詞句制約」と共に、「等位構造制約」、「WH 島条件」は、後に「障壁」で説明されるようになった。これらの説明はすべて統語的な方法によっていることに注目しておこう。

2. いくつかの段階性

2.1 前章でみたような、要素の抜き出しに関する一連の条件、制約は、それとして理解できるであろうが、事実はまだ少し複雑なようである。例えば、「付加部条件」について、つぎの例を見よう。

- 5.a *Which city did you meet Mary [in t]?
b In which city did you meet Mary [t]?

(5a) では、付加部 *in which city* の一部、*which city* を抜き出したために非文になっているが、(5b) では「随伴」(pied-piping) して、付加部の全部を前置して許容されている。「付加部」全体であれば、移動できる、ということからすると、「付加部」が一つのまとまりとして、補部の一部のようにしているのではないか、という推測をすることができるが、ここでは扱わない。

2.2 ここでつぎの例を見よう。

6.a What conclusion did John arrive at t ?

b Who did John give the book to t ?

(安藤 2005 : 629)

(6a、b) では、付加部の一部を抜き出しているのに非文とはならない。前章で、例文 (1a、b)、(2a、b) から導き出した結論、「補部からの抜き出しは可能であるが、付加部からの抜き出しは不可能」というのは実は正しくない、ということになる。「付加部のなかには、限りなく補部にちかいものがある」のであって、両者は截然と区別できるものではなく、付加部のなかには「準補部」(安藤 2005 : 629) とも呼べるものがあるのである。統語的には、別物である付加部、補部の間に中間的な性格のものがあることが確認された。

2.3 このことに関連して、さらにつぎの例を見よう。

7.a *Who did [^{IP}they leave [^{PP} before speaking to t]]?

b *How did [^{IP}you leave [^{PP} before fixing the car t]]?

ここで (7a、b) の文頭の Who、How はいずれも付加部から抜き出したものであり、両方とも非文である。しかし、(7a) の方が (7b) よりは「多少容認度が高い」(安井 1996 : 97) という。ここでもまた補部に近い付加部があることが

「付加語条件」とは何だったのか。(葛西清蔵)

わかる。これで

「付加部と補部とは截然と区別することはできない」

ことが明白になった。(これは後で見るように、‘speak to’が「まとまり」をなしていることによるのであるが)「付加語条件」では、この中間的な言語事実の存在が考慮されていない。つぎに考えなくてはいけないのは、補部、付加部を区別しているのはいったい何なのか、どうして段階性が出てくのか、である。つぎにはこのことを検討する。

3. 段階性をめぐる四つの事実

Ross (1967) があげた「制約」は上に見た「下接の条件」で説明できるようになった。しかし、これで説明できない場合がある。つぎの例をみよう。

8. Who did you see a picture [of t]?

ここでは [of t] の部分が付加部であるから、その一部である who を抜き出せないはずである。この文が許容される理由を確かめるためにつぎの例文が参考になる。

9.a Who did you *see* the picture of t ? (=8)

b *Who did you *glimpse* the picture of t ?

c *Who did you *destroy* pictures of t ?

許容される (9a) に対して、許容されない (9b、c) のちがいは、動詞 *see*、*glimpse*、*destroy* だけである。*see* と *glimpse* について見ると、*glimpse* は ‘see or perceive briefly’ (ODE) とあるように、*see* よりも情報量が多い。また、

picture というものがそもそも see するものであるのに対して、destroy pictures は、互いに「関連性がない」(no bearing) (Cattel 1976: 40) であり、きわめて「意外な組み合わせ」(surprising combination) (Deane 1988: 103) のである。つまり、(9a、b、c)から予想できることは次のようなことである。(9a、b、c)において一番重要であり、焦点は who である。とすると、(9a)では、picture はもともと see するものであるから、see the picture はきわめて「自然なつながり」である。つまり、

「(9b、c)が非文になるのは、これらの文において、重要な who のほかに情報量の多い、「意味的によりゆたかな」(semantically richer) (Grosu 1980: 33) glimpse、destroy があるからではないか」、

という予想をたてることができる。これが正当なことは Erteschik-Shir (1981: 667) が、はっきり 'The more unusual the matrix verb, the less easy extraction is' といっていることでも明白である。この例が関連する四つの場合をみることにする。

3.1 「うそテスト」(lie test)

まずつぎの例をみよう。

11. Bill said: She *claimed* that he had done it.
 - a which is a lie---she didn't.
 - b which is a lie---he hadn't.

12. Bill said: She *made the claim* that he had done it.
 - a which is a lie---she didn't.
 - b ?which is a lie---he hadn't.

「付加語条件」とは何だったのか。(葛西清蔵)

13. Bill said: She *discussed the claim* that he had done it.
a which is a lie---she didn't.
b *which is a lie---he hadn't.

(Erteschik-Shir and Lappin: 1970)

ここでは、主節の述語部分が *claim*、*make the claim*、*discuss the claim* となるに従い、'lie test' のかかり方がちがってくる。つまり、*claim*、*make the claim*、*discuss the claim* と情報が次第に豊かになるにしたがって、この部分が主張になってゆくのではっきりする。これは(12)、(13)で、*that he had done it* が前提となり、それで否定しにくくなっていくために許容度がさがっていく。*claimed*、*made the claim*、*discussed the claim* の順で情報量が多く、主張部分になり、逆に *that he had done it* の部分の情報量が相対的に少なく、前提部分になっていくためである。

以上、統語的な規則と思われていたものが、実は意味のゆたかさ、情報量の問題であることがわかった。

3.2 「指定主語条件」(specified subject condition)

さらにつぎに(14)の例を見よう。

- 14.a The man saw *the picture* of each other.
b *The man saw *John's picture* of each other.

Chomsky (1973) は、(14b) の非文性に注目し、「指定 (specific (i.e. non-pronominal) 主語)」を越えて *the men* と *each other* を関係づけることはできない、という「指定主語条件」(specified subject condition) を提案した。このことに関連するつぎの Grosu (1972) の例をみよう。

- 15.a I gave John *a* picture of himself.
 b ?I gave John *that* picture of himself.
 c *I gave John *Mary's* picture of himself.
 d **I gave John *Mary's sister's* picture of himself.

ここでは John と himself との間に介在するものが、*a > that > Mary's > Mary's sister's* の順で許容度が低くなっている。(これと同類の例が van Valin and LaPolla 1997: 631 にも見られる)。これは確かに (14a、b) で見た「指定主語条件」に関係がある。ここから分かるのは、(15a、b、c、d) で許容されるかどうかの問題は、John と himself の間に介在するものの「情報がどの程度特定のか」という問題でもあるということである。つまり、「指定」とは yes/no という二者択一の問題ではなく、「段階的」(gradable) な問題であることである。そもそも specific という語は「段階的」(gradable) な形容詞である。つまるところ、この「指定主語条件」は、焦点である himself のほかに、情報が多い箇所があってはならない、という制約の一つの現れと見ることができるであろう。(3.1) で見たことが (14a、b)、(15a、b、c、d) でも確認された。

3.3 「前置詞残留」(preposition stranding)

さらにつぎの(16)の例を見てみよう。

- 16.a *Which city did you meet Mary in t ?
 b What conclusion did John arrive at t ?

(16a)、(16b) とともに前置詞で終わっているが、(16a) は非文であり、(16b) は許容される。これは、いわゆる「前置詞残留」(preposition stranding) の問題であるが、どのように扱うべきものであろうか。(16a)、(16b) において which、what はこれらの文で重要な意味をもつ語である。別の面から言うと、

「付加語条件」とは何だったのか。(葛西清蔵)

この二つの文には、which、what 以外に情報が豊かな箇所があってはならない、
ということは、焦点以外のところでは、情報が多くなるような「意外なつながり」がない、つまり、できるだけ「自然なつながり」が望ましいということになる。この「自然なつながり」こそ ‘tightly connected’ (Takami 1992: 26)、
‘close association’ (Bolinger 1972: 113)、‘fit in’ (Cattel 1976: 28) するものである。(16b)の ‘arrive at’ は、まさしく、そのようなつながり、‘semantic unit’ (Siegel 1983: 186) をなしていると言えるであろう。「前置詞残留」にも意味がふかく関わっていることがわかった。Takami (1988: 310-311) は「前置詞残留」を統語的な方法だけで説明しようとするのは ‘fundamental error’ である、
といている。このことはつぎの例でもさらにはっきりするであろう。(2)

- 17.a He is a servant who(m) I cannot do without [t]
b It’s a bottle of gin that John [went to the store] and [bought t]
c Sam is not the sort of guy you can just [sit there] and [listen to t]
d It was the bread which Jim went to the store and picked up.
(Gundel 1988: 81)
e This is the whisky which Bob went to the store and bought.(Grosu 1982: 50)

上で見たように、この「自然なつながり」という観点は、(17a) のような、
いわゆる「前置詞残留」を説明してくれるばかりではない。(17b) では等位接続された [went to the store] and [bought a bottle of gin] から、その一部 a bottle of gin を抜き出しており、「等位構造制約」に反するにもかかわらず許容されている。これはまさしく went to the store and bought~が「自然なつながり」であるからに他ならない。このように「自然なつながり」という意味的な方法が、統語的には許されない現象をも説明してくれる。また、(17c) に

ついて、荒木 (1996 : 372) は、sit and listen to~が「出来事の「自然な流れ」を表わしている時には可能」だと、おなじ主旨のことをのべている。

3.4 「架橋動詞」 (bridge verb)

つぎに「架橋動詞」 (bridge verb) について見ることにする。

18.a She said that Bill had hit Fred.

b What did she *say* that Bill had done t ?

19.a She purred that Fred had given her a present.

b ??What did she *purr* that Fred had given her t ?

(18a) に対して (18b) が許容されるのに、(19a) に対する (19b) の許容度はきわめて低い。(18)、(19)のちがいは動詞 say、purr だけである。purr には 'speak in a low soft voice' (OED) とあるように、purr は say よりもはるかに情報量が多い。ということは、(19b)の許容度が下がっているのは文頭の what のほかに、情報量の多い purr があるためだ、ということになる。⁽³⁾

20.a *What did John *complain* that he had to do t this evening?

b *What did John *quip* that Mary wore t ?

c ?What did he *murmur* that John saw t ?

今までの議論から、(20a、b) の非文、(20c) の許容度の低さは、単純な伝達動詞 say よりも多くの情報をもつ complain、quip、murmur のためであることは明白である。ところが、Chomsky (1977 : 83) が、「主節動詞のどんな性質が「架橋」となり、S' island から wh 句の抜き出しを許すのか不明 (unclear) である」と言っているが、これは Chomsky がいかに情報というものを考慮の外に

「付加語条件」とは何だったのか。(葛西清蔵)

において、統語の面だけで問題を処理しようとしているかを示しており興味ぶかい。

4. 新たな視点 — 「心的態度の一貫性」

以上、「うそテスト」、「指定主語条件」、「前置詞残留」、「架橋動詞」について、いくつかの例を見てきた。一見関連性のないこれらの事象には、「情報のゆたかさ」、「自然なつながり」などの共通項があり、また、

「情報の豊かな部分は焦点となるが、同じ文の中にこれと対立するところ
があってはならない」

ということにたどりついた。

「付加部条件」もこの一部として説明できるのではないか、という視点が当然生まれる。また一方では、上で見たような現象は、葛西 (1998) の主張で見るような心的態度の問題としても扱うことができるであろう。すなわち、つぎの例、

21.a A book by Chomsky came out.

b A book came out by Chomsky.

(21b) においては、(21a) の by Chomsky が文尾に移動しているが、これは、いわゆる 'end weight' によって、by Chomsky を焦点にしようという話者の意図が示された、つまり文の中の要素の移動によって、話者の気持ちの持ち方、心的態度が示されたことになる。

もともと「発話は、ある意図をもってなされ、(これを妨げる理由がないかぎり) この意図はその発話が終わるまで続くはずである」(葛西 1998: 7) とすると、それぞれの文には、それぞれの発話意図があり、それは特定の

ずである。したがって、発話意図を混乱させるようなことは避けられる。たとえば、一つの文に、情報量が多く、意味的に「優位な」(prominent)ところが二つ以上あると許容されえないということになる。‘one chunk per clause’ (Givón 1993: 176) であり、‘one new concept at a time’ (Chafe 1987: 47) である。「一つの文の中には、二つ以上の主張、情報の豊かな部分があってはならない」(葛西 1998: 110) のである。

この視点からすると、例えば、「主節現象」はどうなるのであろうか。主語はもともと聞き手も了解していると話者が考えているもののはずであるから、そこに新たに手をくわえることはありえない、ということになる。また、「等位構造制約」については、A and B という構造において、A と B は、意味的にも、機能的にも同等のものでなくてはならない、という厳しい制約がある。⁽⁴⁾ このうちの B からその一部を抜き出すということは、B に対して、A とはちがう心的態度を示したことになる。また「WH 島制約」では、一度疑問を発したところにさらに疑問を発することになる。たとえば、突然「誰は来たのか？」というのは奇妙である。Who came? (誰が来たのか?) とか Did he come? (彼は来たのか?) ということはあり得ても、*Did who come? (誰は来たのか?) ということはあり得ない。一つのこと、同時に異なる心的態度を示すことは基本的にはありえない。⁽⁵⁾

3. で見てきた四つの点は、話者がどんなことを伝えようとしているのか、どんな気持ちの持ち方をしていたのか、という「心的態度の一貫性」の問題としても考えることができる。

5. まとめ

文は、語の集まりであり、その語どうしの関係は一様ではない。意味的・機能的に関係の深いものは強いまとまりをなし「島」となる。「語」は一番小さな「島」であり、「句」はその上の「島」であり、「節」(「文」) もまた「島」でありうる。このことについてつぎの例をみよう。

「付加語条件」とは何だったのか。(葛西清蔵)

- 22.a *Did Frank probably beat al his opponents?
- b Frank beat all his opponents.
- c Did Frank beat all his opponents?
- d Frank probably beat all his opponents.

(Jackendoff 1972)

(22a) の非文について、Jackendoff (1972 : 85) は「文副詞は、情報を引き出そうとするこおとは意味的に両立しない」という。probably は、疑問文とは両立しない、というのである。つまり、これは (22b) のような「命題」に対して、これを疑問にした (22c)、蓋然性を表わす副詞を加えた (22d) はそれぞれ成立するが、(22c、d) を同時に表現した (22a) は成立しないのである。すなわち、「これはなんときれいな花かもしれません」というのは奇妙である。事実をふまえてそれに感嘆する気持ちと、その事実を疑問視する気持ちとは共起できない。一つの文には、話し手の一つの気持ちしか表現できないのである。話し手の「心的態度」は常に一貫していなくてはいけない。

文は、述語動詞を中心にすれば、その動詞に不可欠な、主語の名詞句、そのあとの間接目的語の名詞句 (いずれも旧情報の来やすい部分)⁽⁶⁾、それに新情報の来やすい直接目的語の名詞句があり、これらが補部である。そのほか動詞との関係がうすい修飾的な要素であり、これが「付加部」といわれているものである。

「主語条件」、「複合名詞句制約」、「等位構造制約」、「WH 島条件」を提案した Ross (1967) は、「島」は「心理言語学的まとまり」(‘psycholinguistic entities’) として示されるのではないか」という質問を投げかけて、自分の論文を終わっている。Grosu (1972) は、この質問にはっきり ‘Yes’ と答えた。われわれが前の章でしてきた議論は、やはりこれを支持するものである。すでに見たように心理的な側面を強く持っており、意味、情報構造などが複雑にかかわっている。つまり、「島」は意味的なつながりのつよいもの、意味・情報上のまとまりが単位をなしたものである。このように心理的側面のつよい「島」は、いわば、話

し手の気持ちの持ち方、心的態度の示された部分である。ここに「移動」などによってあらたに、べつの心的態度を示すことはできないのである。⁽⁷⁾このような微妙なふるまいを見せる「島」が統語的側面からだけ扱われてきた、といえる。

Chomsky (1988: 190) は、研究方法について、つぎのように述べている。

‘The only method of investigation is to look hard at a serious problem and try to get some ideas as to what might be the explanation for it, meanwhile keeping an open mind about all sorts of other possibilities.’ (下線引用者)

これは、まさしく Chomsky の主張するとおりにであると思われるが、bridge verb の問題は、すでに見たように、確実に意味情報にかかわる問題であるのに、これに対して、あくまで統語論的な視点をくずさず、「架橋動詞」が要素の移動を許す理由は「不明」(unclear) と言っているのは、「関連ある事実を無視し」(ignores too many relevant facts) (Seuren 2004: 117) という点で、(上の引用の下線部分) ‘keeping an open mind about all sorts of other possibilities’ とはとても思えない。

終わりに、こういう点から、あらためて「付加部条件」を見ることにする。補部付部加部を截然とわけた。ところが、これらの中間的な例があることがわかった。この付加部条件は、その中間的な言語事実が重要な意味を持つはずなのに、考慮の外にあり、その踏まえている言語事実はきわめてせまく、また事実の扱い方は一面的で、言語事実軽視の、いかにも性急な「条件」だった、と言わざるをえない。動詞にとって重要な「補部」からの移動が可能だということから考えて、この「付加部条件」は「ルート変形」などとの関連でも考えるべきものであると考えられるが、これは今後の課題としたい。

注

- (1) Haiman (1983: 782) には

‘the linguistic distance between expressions corresponds to the conceptual distance between them’

という言葉がある。

- (2) つぎの例文もこのことを支持するであろう。

i.a *What time did they leave after t ?

b Which parent does she take after t ?

この文について、Siegel (1983) はつぎのように言っている。‘unlike ‘leave after’, ‘take after’ is a possible semantic word, roughly equivalent to ‘resemble.’

「自然なつながり」を「関連性」の問題と考えれば、当然 ‘relevance’ をとりあげなければならない。つぎの Wilson and Sperber, Deane の言葉はここに適当であろう。

‘Other things being equal, the smaller the processing effort, the greater the relevance’ (Wilson and Sperber 1992: 134)

‘Low processing cost increases relevance’ (Deane 1988: 107)

- (3) i Near the fountain *sits* / *lies* / **eats* / **burps* / **spits* a large friendly gorilla. (William and Dubinsky 2004: 99)

ここにおいても意味がゆたかになると非文になっている。

- (4) Schachter (1977: 90) に次のようにある。

The coordinate constituents constraint: The constituents of a coordinate construction must belong to the same syntactic category and have the same semantic function.

また、Quirk at al. (1985) には、

It is therefore quite usual for coordinate clauses to belong to the same

semantic as well as functional category.’

とある。

(5) つぎの例を見よう。

- i.a *Who did [a friend of t] marry you?
- b *Who did you give [a friend of t] a book?
- c Who did you see [a friend of t]?

(中島・池内 2005 : 107)

(ia、b、c)の例で明白なように、旧情報が来やすい主語、間接目的語からの抜き出しは許容されないが、新情報が来る直接目的語からの抜き出しは許容される。

なお、「セット読み」とは、例えば

- i Why and where did you go with her?

において、andで繋がれた why と where は、機能的におなじものでなくてはならない。この場合、why、where は「セット」であり、全体で疑問詞は一つと見ることができるといえる。

(6) 奥野 (1989 : 106) はつぎの例文

- i.a The job was offered *him*.
- b *The job wasn't offered Max, it was offered *Harry*.
- c *The tuba was given *John Phillips Sousa*.

(ia、b、c)によって、間接目的語は「古い情報でなければならない」といっている。

- (7)
- i.a *Into the house the chairs the boys shoved.
 - b *Who did John tell you who Mary gave...to...?
 - c *Who, about the secret, does John believe that Mary talked to ...

(i.a) には、into the house, the chairs の前置がるし、(i.b、c) では、それぞれ、二つの疑問、疑問と話題化の移動がある。(ia) は Bolinger (1978) の例であり、「二重転位」(double dislocation) とよばれる。また、(i.b.c) は

「付加語条件」とは何だったのか。(葛西清蔵)

中島 (1934) の例である。

参考文献

安藤貞雄 2005 『現代英文法講義』 開拓社

安藤貞雄・小野隆啓 1993 『生成文用語辞典』 大修館書店

荒木一雄 (監) 1991 『英語学の輪郭』 英潮社

荒木一雄 (編) 1996 『現代英語正誤辞典』 研究社

荒木一雄 (編) 1999 『英語学用語辞典』 三省堂

Bolinger, D. 1972 'What did John keep the car that was in?' *LI* 3: 109-115

Bolinger, D. 1978 'Asking more than one thing at a time' In Hitz, H.(ed.)
Questions Redel Pub. Company

Cattel, R. 1976 'Condtraint on movement rules' *Lg.* 54: 61-77

Chafe, W. 1987 'Cognitive constraints on information flow' Tomlin, R.(ed.)
Coherence and Grounding in Discourse John Benjamin Pub. Company

Chomsky, N. 1973 'Conditions on transformations' Anderson, S. and P.
Kiparsky(eds.) *A Festschrift for Morris Halle* Holt, Rinehart and
Winston

Chomsky, N. 1977 'On WH-movement' Cullicover, P. W. et al.(eds.) *Formal
Syntax* Academic Press

Chomsky, N. 1986 *Barrier* MIT Press

Chomsky, N. 1988 *Language and Problems of Knowledge* MIT Press

Deane, P. D. 1988 'Which NPs are there universal possibilities for extraction
from?' *Papers from the 24th Annual Regional Meeting of the Chicago
Linguistic Society* Part 1, 100-111

Erteschik-Shir, N. 1981 'More on extractability from quasi-NPs' *LI* 12: 665-
670

Erteschik, Shir, N. and S. Lappin 1970 'Dominance and extraction: a reply

- to A. Grosu' *Theoretical Linguistics* 10, 81-96
- Givón, T. 1993 *English Grammar A Function-Based Introduction II* John Benjamin Pub. Company'
- Grosu, A. 1972 *The Strategic Content of Island Constraints* Working Papers in Linguistics, Ohio State Univ.
- Grosu, A. 1980 'On the analogical extension of rule domains' *Theoretical Linguistics* 7-1/2: 1-55
- Grosu, A. 1982 'The extragrammatical content of certain "island constraints"' *Theoretical Linguistics* 9-1: 19-67
- Gundel, J. K. 1988 *The Role of Topic and Comment in Linguistic Theory* Garland
- Haiman, J. 1983 'Iconic and economic motivation' *Lg.* 59: 782-819
- Jackendoff, R. 1972 *Semantic Interpretation in Generative Grammar* MIT Press
- 葛西清蔵 1998 「主節現象」(MCP) 葛西『心的態度の英語学』リーベル出版
1998: 53-64
- 葛西清蔵 1999 「もう一つの経済性」 葛西(編著)『英語学と現代の言語理論』
北海道大学図書刊行会 1999: 112-122
- 葛西清蔵 2006 「例文にやさしい英語学にむけて」札幌大学外国語学紀要『文化と言語』64: 23-41
- 中島平三 1984 『英語の移動現象研究』研究社出版
- 中島平三・池内正幸 2005 『明日に架ける生成文法』開拓社
- 奥野忠徳 1989 『変形文法による英語の分析』開拓社
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. and J. Svartvik 1985 *A Comprehensive Grammar Of the English Language* Longman
- Ross, J. R. 1967 *Constraints on Variables in Syntax* Indiana Univ. Linguistics Club
- Schachter, P. 1977 'Constraints on coordination' *Lg.* 53-1: 86-103

「付加語条件」とは何だったのか。(葛西清蔵)

Seuren, P. A. M. 2004 *Chomsky's Minimalism* Oxford Univ. Press

Siegel, M. E. A. 1983 'Problems in preposition stranding' *L1* 14-1, 184-188

Takami, K. 1988 'Prepositrion stranfing' *Lingua* 76: 299-335

Takami, K. 1992 *Preposition Stranding* Mouton

Van Valin, Jr. R. D and R. J. LaPolla 1997 *Syntax Structure, meaning and function* Cambridge Univ. Press

William, D. D. and S. Dubinsky 2004 *The Grammar of Raising and Control* Blackwell Pub.

Wilson, D. and D. Sperber 1992 'An outline of relevance theory' Konishi, T. et al.(eds.) *Current Approach to Linguistics* Eichosha Ltd.

安井 稔 (編) 1996 『コンサイス英文法辞典』三省堂